

# ドイツ「古城街道」沿いの世界遺産

～ 画家アルブレヒト・デューラーの自画像 ～



【バンベルクの旧市街】

ドイツの街道で真っ先に思い浮かぶのは、ビュルツブルクとフュッセンを結ぶ「ロマンティック街道」かもしれません。ツアーで行かれた方も多いのではないのでしょうか。ドイツは「街道の国」とも称され、そこには観光要素も含まれます。ご参考までに、主な街道を下記の表にまとめてみましたので、ご覧ください。

街道名	主な区間、距離、概要
エリカ街道	ハノーファー ～ リューベック 約 300km * エリカの花が咲く道を南北に繋ぐルート
メルヘン街道	ハーナウ ～ ブレーメン 約 600km * グリム兄弟の童話を辿る南北に縦断するルート
ロマンティック街道	ビュルツブルク ～ フュッセン 約 360km * ドイツの美しい中世の街を南北に繋ぐルート
ゲーテ街道	フランクフルト ～ ドレスデン 約 500km * 文豪ゲーテのゆかりの地を東西に巡るルート
<b>古城街道</b>	<b>マンハイム ～ プラハ (チェコ) 約 1,000 km</b> * <b>点在する中世の古城を東西に横断するルート</b>
ファンタスティック街道	コンスタンツ ～ バーデンバーデン 約 400 km * 黒い森や温泉保養地を巡るルート
アルペン街道	リンダウ ～ ベルヒテスガーデン 約 500km * アルプス山脈を東西に横断するルート

今回ご紹介するのは、「古城街道」こと、チェコのプラハまで続く唯一の国際街道です。ドイツ国内で最長距離を誇ります。その名の通り、街道沿いには中世に建造された城が点在しています。古城街道は、日本ではあまり馴染みがありませんが、ドイツ国内ではとても人気があり、高速バスやローカル鉄道などが運行しています。そして、ドイツを代表する画家アルブレヒト・デューラー（1471年～1528年）は、この街道沿いの街、ニュルンベルクの生まれです。

古城街道の地理的な起点は、ライン川とネッカー川が合流するマンハイムですが、ツアーの場合はおおよそ、学生の街ハイデルベルクから始まります。ハイデルベルクは人気の観光地ですが、世界遺産には登録されていません。しかし、近郊には世界遺産が2カ所あります。ハイデルベルクから約20km南西にドイツ・ロマネスク様式の先駆けとなった『シュパイアの大聖堂』、約30km北上に8世紀のカロリング朝時代の面影を残す『ロルシュの修道院遺跡』があります。ドイツは世界3位の世界遺産保有国(51件)で、世界遺産の宝庫と言っても過言ではないのです。

バスでハイデルベルクを出発すると、蛇行するネッカー川沿いに数多の古城が次々と目に入ってきて、これぞ“古城の街道”だと実感できます。走行すること約110km、約2時間でローテンブルクに到着します。ローテンブルクはロマンティック街道の中心地ですが、古城街道と交差しているため、実は古城街道の街でもあります。このことは、あまり知られていません。

さらに65kmほど走行すると、古城街道の中心の街、ニュルンベルクに到着します。ニュルンベルクは画家デューラーの生誕地で、“ドイツ絵画の聖地”としても知られています。第二次世界大戦の国際軍事裁判が開かれた歴史の重みを抱えつつ、“おもちゃの街”でもあり、世界最大の玩具見本市が開催されています。くるみ割り人形に代表されるように、伝統的なおもちゃの工芸品は人気のドイツ土産です。

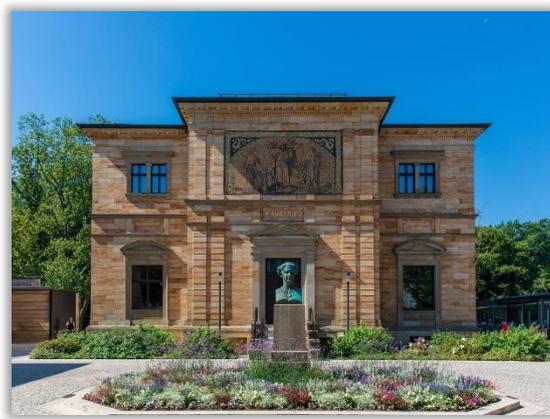
続いて、ニュルンベルクから北へ約60km、世界遺産『バンベルクの旧市街』に到着します。第2次世界大戦の戦火を免れた街で、13世紀以降の中世の建造物がほぼ当時のままの状態に残されています。その美しい街並みは、「バイエルンの真珠」と称されるほどです。バンベルクには、メイン川からドナウ川を繋ぐライン・メイン・ドナウ運河が流れています。リバー・クルーズの停泊地で、ヨーロッパ各国からの観光客が絶えません。バンベルクから約55kmの道のりを行くと、バイロイトに到着します。

バンベルクとバイロイトは「音楽の都」です。

バンベルクはドイツの名門バンベルク交響楽団の本拠地です。バイロイトでは、毎年7月下旬から約1か月にわたり、バイロイト祝祭劇場で『バイロイト音楽祭』が開催され、音楽家リヒャルト・ワーグナーのファンが世界各地から集まります。そして、バロック様式の豪華な歌劇場が、『辺境伯オペラハウス』として世界遺産に登録されています。



バイロイト祝祭劇場



リヒャルト・ワーグナー博物館

古城街道には、ドイツ絵画の聖地「ニュルンベルク」とドイツ音楽の聖地「バンベルクとバイロイト」が隣り合わせの、まさに“芸術街道”となっています。そして、古城街道は遠く国境を越え、チェコの世界遺産『プラハの歴史地区』まで続いています。

この古城街道のエリアで活躍したのが、中世ドイツ最大の画家、アルブレヒト・デューラーです。主に街道沿いの中心地ニュルンベルクを拠点に活動していました。デューラーの代表作といえば、①の自画像で、とても厳かな感じのする作品です。

イエス・キリストを彷彿とさせるこの作品は、自画像というより宗教画に近い印象を抱かせます。デューラーは、自画像を複数枚、描いています。油彩画の3作品を比較してみると、20代後半に描かれた①と②は顔がよく似ているのに対して、③は輪郭や表情が異なっていて、本当にデューラーなのかどうか、疑問に思う方もいるでしょう。しかし、少年期の銀筆で描かれた④と、この③は似ています。①と②は少し面長に描いたのかもしれませんが。成長するにつれて、大人の顔へと変化していった時間の経過が伝わってきます。



自画像① / 油彩画 1500年  
アルテ・ピナコテーク (ミュンヘン)



自画像② / 油彩画 1498年  
プラド美術館 (マドリッド)



自画像③ / 油彩画 1493年  
ルーヴル美術館 (パリ)



自画像④ / 油彩画 1484年  
アルベルティーナ (ウィーン)

この4作品で注目すべき点は、顔の向きです。自画像②、③、④は斜め前から描いているのに対して、自画像①は真正面から描いています。自画像①に、とりわけ卓越さを感じる部分は、「鼻」です。顔を描く時、正面から描くのが最も難しい。目や口は平面上にあるのでまだ良いのですが、それらと繋がる鼻は顔の中心であり、高低差もあるので、画家が最も苦戦するところです。①はご覧の通り、真正面にも関わらず、鼻の高さは自然な立体感をもっています。また、背景を黒色にしたことが、この作品に威厳をもたらしています。背景の黒色→髪の毛の焦げ茶色→茶系の肌色とグラデーションのようになっていて、顔が浮き上がってくるように見えます。自画像①の完成当時、人々の目にはどのように映ったのでしょうか。デューラーが自分自身を神に見立てて描いた？……単純にそうとも考えられます。真正面の自画像は珍しかったですし、イエス・キリストを思わせる、インパクトの強い、常識破りの作品であったことは間違いありません。奇異な目で観た人もいたかもしれません。しかしそれ以上に、デューラーの才能、実力に驚かされたのではないのでしょうか。制作当時はまだ28歳、かなりの自信を窺えます。画家のサインを注意深く観てください。サインは作品の最下部に記すことが一般的ですが、自画像①では顔の横に大きく記されています。これも自信の現れでしょう。若くとも実力が伴っていれば、それくらいの顕示欲があっても良いのではないのでしょうか。



『芝草』 / 1503年  
アルベルティーナ (ウィーン)



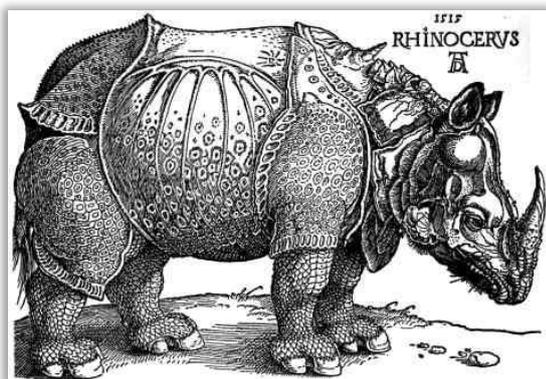
『野うさぎ』 / 1502年  
アルベルティーナ (ウィーン)

画家の実力が顕著な作品をご紹介します。  
2枚の水彩画をご覧ください。

『芝草 (1503年)』は、草木を一本一本、生え際から先端まで精緻に描いています。書き直しの利かない水彩画で、誤魔化しは、いっさいありません。その跡すら見当たらない“一発勝負”で描き切った、正確無比の描写力です。『野うさぎ (1502年)』については、動物の生命感が見事に表現され、落ち着いた色調がさらに作品を美しく見せています。リアルさを追求すると、概して色調が強くなり、生命感が損なわれ

てしまう傾向にあります。それをまったく感じさせません。描写力、色彩力ともに才能溢れる2作品です。

デューラーは、自画像や水彩画以外にも、『東方三博士の礼拝 (1504年)』に代表される宗教画や『犀 (1515年)』のような木版画などにも取り組んでいます。2度のイタリア旅行で、ルネサンス絵画を学び吸収したことにより、作品の幅が広がったのです。自画像②は軽やかな色彩や戸外の風景が取り入れられていて、その影響を感じさせます。しかしながら、いずれも私のイメージするデューラー作品ではありません。やはり自画像①の印象が強すぎるためでしょうか。自画像以外の作品に、デューラーらしさを感じられません。それは、ルネサンス期の他の画家たちと同じような題材、同じような色調のトーンであるため、画家の際立った独自性が足りないからです。個人的な見解ですが、「正面から正々堂々と力強く描き切る」。この堂々とした、威厳に満ちた作品、これがデューラーらしさです。威厳に満ちた作品という点では、レオナルド・ダ・ヴィンチ作『モナ・リザ』ですら及ばないでしょう。自画像①は、デューラーの唯一無二の傑作だと思います。

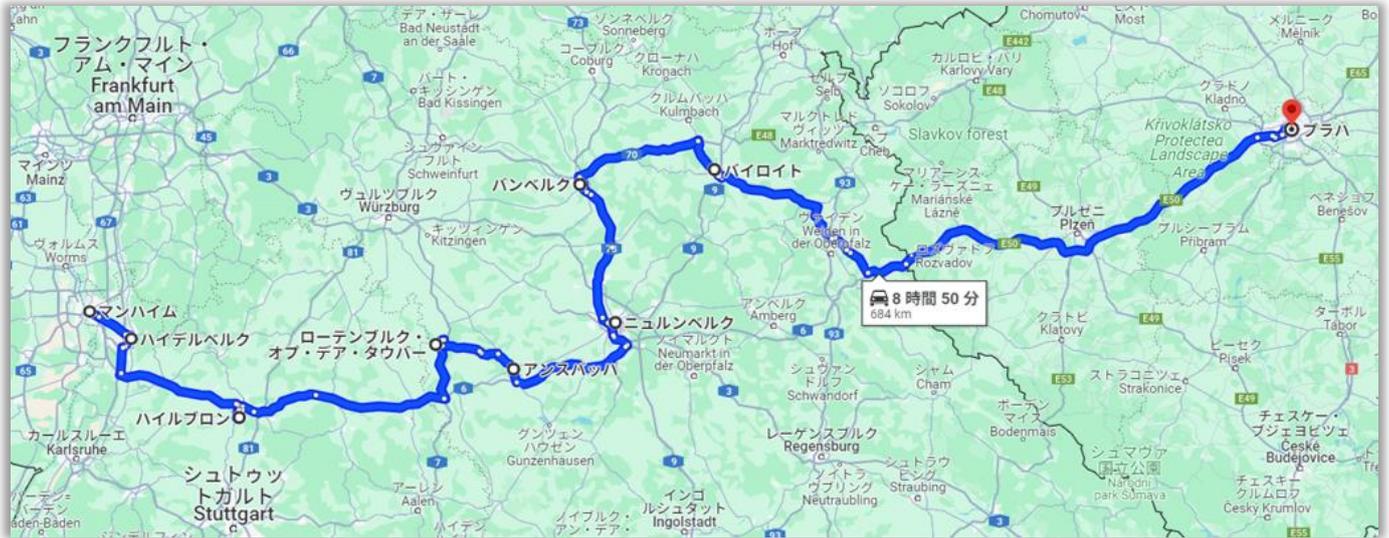


『犀 (サイ・木版画)』 / 1515年  
ゲルマン国立博物館 (ベルリン)



『東方三博士の礼拝』 / 1504年  
ウフィツィ美術館 (フィレンツェ)

「古城街道」というと、聞き慣れない感じがあるかもしれませんが、ドイツではかなり知られた街道で、中世ドイツ、神聖ローマ帝国の中心地だったところです。ドイツ最大の画家デューラーは、そのような歴史深く、芸術や工芸技術の発展した街に生まれ、その才能を開花させました。バンベルクやバイロイトなどの世界遺産も在る、由緒あるドイツの歴史街道を訪れてみては、いかがでしょうか。



沼田政弘

### ～ちょこっとコラム～

もうすぐクリスマスですね。ヨーロッパでは11月下旬から約1カ月間、クリスマス・マーケットが開かれています。特にドイツのクリスマス・マーケットは、世界的にも有名です。世界最大規模のシュトゥットガルト、世界最古開催とされるドレスデン、世界一有名で世界最大集客数のニュルンベルク。これら3つは、「ドイツの三大クリスマス・マーケット」として知られています。古城街道の街々では、ちょうど今、クリスマス・マーケットが開催され、賑わいを見せています。小雪が舞い散る中で、古城を眺めながらのクリスマス、最高だと思いませんか。



ニュルンベルクのクリスマス・マーケット